

この学びに
関する
SDGsの
目標



大学の学び

実学主義の下、国際農業を学び、
飢餓や食料問題の解決を目指す
東京農業大学 国際食料情報学部 国際農業開発学科
熱帯作物学研究室

社会科学と自然科学の
両面から国際農業を学ぶ

東京農業大学 国際食料情報学部
は、世界と日本の食料や農業、農村
問題について学ぶ学部だ。同学部の
4学科（*1）のうちの1つである

私たちが紹介します



伏見和子
ふしみ・かずこ
東京農業大学大学院 農学研
究科 国際農業開発学専攻
博士前期課程1年

神奈川県立横浜国際国際高等学校卒業。東京農業大学国際
食料情報学部国際農業開発学専攻卒業。



射場木萌春
いは・ももは
東京農業大学大学院 農学研
究科 国際農業開発学専攻
博士前期課程2年

東京都立国際国際高等学校卒業。東京農業大学国際食料情
報学部国際農業開発学専攻卒業。

国際農業開発学学科は、国際的な農業
開発の専門家として活躍する人材の
育成を目指している。

同大学大学院農学研究科博士前期
課程1年の伏見和子さんは、高校時
代に社会問題を学ぶ授業で飢餓問題
に関心を持ち、食料不足などの食料
問題を学びたいと考え、国際農業開
発学学科を志望した。

カリキュラムの大きな特徴は2つ
だ。1つめは、大学の教育研究の理
念である実学主義の下、1〜3年次
まで各学年で必修の農業実習がある
こと。2つめは、社会科学と自然科
学の両分野の専門科目が開講されて
いることだ。

「途上国の農村社会について学ぶ
社会科学系の科目と、熱帯・亜熱帯
の作物育種（*2）や土壌を学ぶ自
然科学系の科目の双方を履修でき、

途上国の状況がより立体的に見えて
きました」（伏見さん）

同大学大学院農学研究科博士前期
課程2年の射場木萌春さんは、入学
時から農業に加え、国際協力に関心
があった。

「2年次の必修科目『国際農業協
力論』では、政府開発援助のプロジェ
クトにかかわった教授から、豊富な
写真を使った授業で、現地の実情を
学びました。大学の学びを現場でど
のように生かせるのか、イメージす
ることができました」（射場さん）

国内外の機関と連携し、
実践的に研究を進める

同学科では、実践的な国際農業開
発学に低学年次から触れられるよう
に、1年次から研究室に入室できる

この学びに関する
他のSDGsの目標



（*3）。伏見さんは1年次6月から
射場さんは2年次11月から入江憲治
教授の熱帯作物学研究室に所属し
た。小学6年生までアメリカで過ご
した射場さんは、帰国後、日本の米
の味に感動した経験から、イネの研
究を志した。

「2年次の必修科目『農業専門実
習』では、田植えから収穫までを行
いました。実習用水田の隣には熱帯
作物学研究室の水田があり、環境ス
トレス（*4）に強いイネを研究し
ていると知りました。私もイネの研
究を行い、途上国の農業に役立てた
と考え、入室しました」（射場さん）

同研究室は、大学院の農学研究科
国際農業開発学専攻と合同で学ぶ。
熱帯・亜熱帯地域で栽培されている
農作物の特性解明や新規利用法の開
発、栽培技術の開発・改良に重点を

* 1 国際農業開発学学科、食料環境経済学学科、国際バイオビジネス学科、国際食農科学科。 * 2 作物を遺伝的に改良すること。 * 3 1年次から室員として入室可能。3年進級時までは全員が研究室に所属する。 * 4 水の不足や土壌の過湿、高温や低温、塩の影響など、作物の生育を抑制するもの。

置いた研究をし、「目標2 飢餓をゼロに」に貢献する研究を行う。

研究は、国内外の機関と連携しているのが特徴だ。伏見さんは、3年次に2週間、入江先生の紹介でケニアのビヒガ県での農業実習を経験。4年次に10か月間、同県に青年海外協力隊の短期ボランティア（*5）として滞在し、同県の農業多様性評価に関する調査・研究を行った。主食がトウモロコシの同県では、食事の単純化が原因による肥満や、ビタミン・鉄分などの不足による栄養不良の問題があった。

「現地の家庭を訪問し、調理段階で使われている食品や調味料の量を調べて、摂取カロリーや栄養素を分析するとともに、地域で伝統的に栽培されている作物種類の多様性も調査しました（写真1）。伝統的な作



写真1 伏見さんが、地域野菜を使った料理の調理手順や方法について教えてもらっている様子。学部生時代は、ビヒガ県の1地域の研究をまとめ、大学院進学後は、他の4地域を調査・分析している。

写真2 フィリピンの国際稲研究所で、射場さんがイネの根の到達深度を測っている様子。同研究所には、世界中からイネの研究を行う研究者や学生が集まる。そこで射場さんは、研究発表も経験したという。



物の有効利用を促して（目標15）健康を促進するだけでなく（目標3）、新たな利用開発を行うことで経済創出につなげ、貧困からの脱却（目標1）ができればと考えています」（伏見さん）

射場さんの研究テーマは、乾燥地域でも栽培できる、干ばつに強いイネの開発だ（目標13、写真2）。学部3年次から研究を始め、博士前期課程1年次の9月から1年間はフィリピンの国際稲研究所で、2年次10月から3か月間は茨城県つくば市の農業・食品産業技術総合研究機構で研究を行った（目標17）。

「既存の根の形質を組み合わせることで理想の根のタイプを調査しています（目標15）。学部生時代の研究テーマだった葉や茎に比べ、根は掘り出してから泥を落とし、状態を

計測するまでの処理に時間と手間がかかりますが、研究の余地がある分野です。途上国の農業に貢献できるよう、日々、目標を持って取り組んでいます」（射場さん）

国際的な研究経験を生かし、農業関連への就職を目指す

同学科の卒業生は、約半数が農業関連企業・機関に就職し、約2割が大学院に進学する。伏見さんは、国際的な農業機関や農業開発に携わる企業への就職を希望している。

「専門科目では、途上国の開発援助の立案・運営・管理の方法を学びました。研究では、その手法を実行し、日々、振り返りから改善を行うよう心がけました。そうした経験を生かして、国際農業に貢献していきたいです」

射場さんは、博士後期課程に進学後、イネの研究者を目指したいと語る。

「国際機関での研究を通じて、文化や価値観が異なる人と協働して問題解決に取り組む力が鍛えられました。そうした経験を生かして、これからも研究にまい進していきます」

学びとSDGs

海外での研究で適応力を磨き、国際農業に貢献できる人材に



東京農業大学
国際食料情報学部
国際農業開発学教科教授
入江憲治
いりえ けんじ

地球温暖化による気候変動は、干ばつなどの問題を引き起こし、農業の安定的な生産にも影響を与えています。そうした問題に対応するため、本研究室では、新たな品種開発、品種改良に取り組んでいます。長年の研究成果から、1000品種・系統のイネ・ヤムイモ・サトウキビなどの熱帯作物資源を保有しているのが強みです。

農業・農村開発の分野で国際的に活躍する人材には、どのような環境でも目標達成に向けて行動し続ける適応力が求められます。本研究室は、JICA（*6）や国際熱帯農業研究所など、国内外の機関と連携した研究を推進しているため、実践的な研究に参加することが可能です。低学年次から海外実習や研究に積極的に参加し、現地の人との協働を経験することで、現地の生活や文化への適応力を磨くことを期待しています。

世界の農業・農村開発に関心がある高校生には、多様な人と接する機会を持ち、異文化理解のための柔軟な思考力や協働のためのコミュニケーション力を養ってほしいと思っています。

* 5 2018年7月に同大学が青年海外協力隊事務局と結んだ大学連携協定に基づき、学生を休学させることなく協力隊員として派遣し、プロジェクトと連携した活動ができる制度を利用している。 * 6 独立行政法人国際協力機構。政府開発援助の実施機関の1つであり、国際協力の促進に資することを目的としている。